

## 落書きと楽書きのメディア論（その1）

中 村 隆 志

### は じ め に

メッセージはメディアである。まず、この言から始めよう。本稿はこの言より始まり、この言で締めくくられる。おや、と思われた読者もおられるに違いない。昨今のマスコミで引く手あまたのM.マクルーハンの有名な言、メディアはメッセージである、のパロディかと思われる向きも多々あろう<sup>[1]</sup>。無理からぬこと承知の上である。しかし、冒頭の言はパロディではない。この言はマクルーハンの言を見直し、補填するためのものである。短く述べよう。メディアとメッセージの分節はメディアにまつわる現象の記述に欠かせぬものである。現象の記述を進める中では分節の厳密性が求められていくが、その一方で両者の分節の厳密性そのものが空疎である。マクルーハンの言はこの空疎さを言い当てて余りある。マクルーハンの言は歴史的時間の流れを俯瞰するのに加えて、さらに共同体の変化を記述する我々観察者の作動を俯瞰したものとも言えるだろう。が、マクルーハンの論考は、歴史的時間の流れ及び共同体の変化を前提として、それを概観するのみである。特定のメディアがメッセージ性をもつ構造は示されるが、その羅列をいくら重ねても構造論から出ることはない。本稿は静的な構造論から離れるためのものである。ここで示されるべきことは、メディアとメッセージの分節がそもそも運動であり、その運動こそが歴史的時間の流れを生み出し、共同体の変化をもたらすことである。メディアとメッセージの分節については、両者を生成していく行為と、両者を弁別する認識とに分けて考えることができる。生成のための行為と弁別のための認識は相補的だ。行為と認識、及びそれらの相補性を目の当たりにするために、落書き（楽書き）は登場する。落書き（楽書き）はメディアとメッセージの分節を状態としてではなく、運動として理解するための概念装置として、または象徴として定位されるだろう。行為と認識との相補性の理解が、運動を理解すること及び歴史的

時間の流れと共同体の変化の継起を理解することへと導く。この観点に立つならば、マクルーハンの言は偏ったものとなり、補填されるべきである。よって、私はマクルーハンの言と逆の言、すなわち冒頭の言を持ち出すのだ。2つの言が成立する両義的状况こそ、運動の帰結であり、さらに新たな運動を継起する。運動論の構成が本稿の目論見である。以下、詳述していこう。

## 1. 落書きの行為論

本稿は落書き（楽書き）の定義をしようというものではない。それは定義されるべきでもない。ラスコーに代表されるような世界中に点在する壁画は落書きか、子供が残したであろうケンケン遊びの跡は落書きか、水滴で曇った窓ガラスの一部を指でこすったら跡が残った、これは落書きか、などと聞かれても答えに窮してしまう。大辞泉<sup>[2]</sup>によると、「らくがき」=「[落書（き）、楽書（き）] 書くべきところでないところに文字や絵などをいたずら書きすること。また、その書いたもの。」、また、「らくしょ」=「[落書] 政治・社会や人物などを批判・風刺した匿名の文書。人目に触れやすい所に落として人に拾わせたり、相手の家の門・扉に貼りつけたりした。中世から近世にかけて盛行。おとしぶみ。」とある。本稿では、上の内容とは異なるが、行論のための定義をしよう。まず、行為としての「落書きする」と認識対象としての「楽書き」とを区別する。「落書きする」を「公共の建造物や私有家屋の壁に明らかに人目につく大ききで文字や絵を記載することとする」「落書きする」ことによって生じた記載を「落書き」とする。「楽書き」は「共同体内の慣習上、本来書かれるべきでないところに書かれており、見つけた者に憤りを感じさせたり、喜怒哀楽の情や驚き、不可解さを興させる人為的な記載」とする。落書きの定義は明確であるが、楽書きの定義は曖昧であると映ることだろう。楽書きにはいたずら書きも当然含まれる。上記の意味で言うならば、例えば、一時イギリス国内を騒がせたミステリーサークルも楽書きに含まれる<sup>[3]</sup>。が、特定の記載を取り出したとき、それが楽書きであるかどうかは、上述の定義では個人差がある。人為的かどうかの判断も一義的にはできない。が、ここでは敢えて上の定義を用いる。読者の経験に訴えたい。ほぼ全員の読者が、楽書きを見つけて鼻で笑ったり、憤りを感じた経験がきつとあると私は推察する。もしそんな経

験があったなら、それがあなたにとっての楽書きの一つに当てはまる。楽書きはより広く捉えられるはずであるが、以下の行論には上の定義を用いていく。

落書きの空間的調査は困難である。調査をしている間に別の場所で誰かが落書きを増やしている可能性がある。街全体の調査をするなら、街の人間全員に退去してもらわなければ、良いデータはとれない。しかし、奇跡的に（決して良い奇跡ではない）街全体が封印されたままの場所がある。ポンペイは紀元1世紀、ヴェスヴィオ山の噴火により、街ごと全滅した。その街跡が遺跡として現在でも保存されている。本村凌二は、遺跡に残存する1万点以上の落書きに注目し、「ポンペイ・グラフィティ：落書きに刻むローマ人の素顔」<sup>[4]</sup>の中で、当時の街の様子やローマ人の息吹を躍動的に語った。

当時はまだポスターを作るような時代ではなかった。そのことを示すのが、公職選挙の公示や立候補者の宣伝であり、これらが直接建物の壁に書いてあった。また、当時の民衆娯楽である剣闘興業の宣伝などもそのまま家屋の壁に書いてあったりした。かといって、建物の壁が公共的なものとされていたわけではなく、選挙の公示文のすぐ近くに特定の立候補者の推薦文が私的に書いてあったり、剣闘興業の告示文の近くに当時のアイドルであった剣闘士に対する恋慕の情がしたためてあったりする。また、ただ誰かの名前だけが書いてあったり、罵詈雑言、誹謗中傷、失恋の痛手、恋の鞘当て、人生に対する詩などが壁にたくさん残っている。「リウィアからアレクサンデルに、ご機嫌よろしく。もしお元気なら、あまり心配しません。もし死んでいるなら、うれしいことです。」（本村訳抜粋）などの文面は現在でも通用する愉快さがある。更に、酒場の中の壁には主人が書いたであろう酒や料理の値段が直接壁に書かれており、その一方で外の壁には客が書いたであろう酒に対する礼賛の思いや酒場の主人の悪口が書かれていたりする。路地裏の売春宿の近くの壁にはその宿の評判がたくさん書いてある。また、「おお壁よ！こんなに多くの落書き人の思考に力のかしたことによって、お前はくずれ去ってしまわないだろうか。」（同抜粋）という落書きに対する落書き文が円形闘技場、劇場などの公共の場を含めて4カ所残っている。

上記の落書きは、本稿の定義の「落書き」に当てはまる。膨大な数の落書きは、当時の識字率の高さを偲ばせる。同書の調査を通して、街の壁がコミュニケーション手段として用いられていた点は見逃せない。現代では、紙の大量生

産技術や印刷術などのメディア技術の発達により、それらの技術を用いている社会においては、建物の壁に直接記載してコミュニケーションを行う人は少ない。いることはいるが、それを手段とするコミュニティは迷惑集団とされる。選挙活動として立候補者の名前を家屋の壁や電柱に直接書くような政治団体はない。各種興業団体も宣伝にはポスターやマスコミなどを利用する。メディアの発達により、ポンペイで為された壁による公共のコミュニケーションは姿を変え、現在では建物の壁に何か記載すること自体、社会的慣習から外れた行為となっている。無論、なくなったわけではない。故に注目されるべきなのだ。

印刷メディアが未発達だったポンペイ末期の時代、書くという行為を通してメッセージが残されるだけでなく、書かれた壁がメディアの意味を持った、それはメディアでなかったものがメディアとしての機能を持つことだった。つまり、メディアとメッセージは同時に発生していたのだ。メディアとメッセージを同時に発生させること自体、書くという行為に本来的に付随する権能である。この同時発生こそ、ポンペイにおける公共的な告示と私的な記載の併記を可能にした。ここで重要なことは書くという行為によって書かれる場そのものが意味を持つてしまうことである。現代では家屋の壁、特に他人の家屋や公共の壁などに何かを記載することは、例えその共同体全体に大きな恩恵をもたらす内容のものであっても、明らかに道徳に反する。メディア技術の発展と相まって、公共性の概念、公共的コミュニケーションの方法が決定的に変化している。このことが逆に、現代の落書きに別の意味を付加する。それは「落書きするな」という道徳や社会的慣習にたいする反抗、ひいては共同体内の道徳慣習全体に対する反抗の意味が付加することをもたらした。メディア技術の社会では、落書きすること自体、社会的意味をもち得るのである。迷惑集団の意図が共同体の慣習に対する反抗ならば、そのコミュニケーション法は理に適っている（が、実際困ったものである）。

まとめておこう。書くという行為は、傷やインクのしみ跡などを通して空間を切り分けることであるが、それだけではない。書くという行為を通して、書かれる一瞬前までメディアでなかったものに対して、メディアとメッセージという地平がもたらされる。傷やインクのしみ跡などが、それを大きくうわまわる広い空間をその外側の空間と分節する直接の原因となる。書くという行為に付随する権能である。無論、書くという行為全てにおいてその権能が発現する

わけではない。現代のメディア技術の発展がその抑制に働いているのだろう。故に現代では、落書きするという行為がその権能をあらわにする象徴となるのだ。そればかりではない。現代の落書きは更に別の時空間の分節をもたらす。道徳や社会的慣習の効力が確かに及ばない空間または時間が他の時空間と分節される。それは往々にして、道徳や社会的慣習に反抗する、または修正を求める書き手の意図を明瞭にすることでもある。落書きするという行為は時空間を多重に分節する運動なのだ。

本章の最後にW・J・オングの議論に短く触れておく<sup>[5]</sup>。彼は紙のメディア技術の発展以前の文化の段階を声の文化、紙のメディア技術発展後の文化を文字の文化と呼ぶ。彼は、文字の文化と比べた声の文化の特徴を9個挙げている。文字で書かれたものに限定したとしても、落書きの性質のいくつかは声の文化の特徴に当てはまる。例えば、5番目（順番はオングの訳書による）の「人間的な生活世界への密着」、9番目の「状況依存的であって、抽象的でない」などは明瞭にそれに当たる。特に世界に2つと同じ場所がない以上、状況依存的であることは落書きの宿命である。声の文化と文字の文化の間の議論において、落書き（及び楽書き）を取り上げることは何らかの示唆を与えるものと思われる。これについては稿を改めるとしよう。

## 2. 錯視図形の運動論

本章では、楽書きを論ずる前段階として、認識について論じる。特に認識を認知状態としてではなく、運動として理解することを読者に求めたい。そのため概念装置として、認知的反転図形または多義図形を用いる理由を述べて行く。

錯視研究の歴史は古い<sup>[6]</sup>。古くはアリストテレスが頭上の月と地平近くの月の大きさが違って見える錯視を指摘した。19世紀後半から20世紀前半にかけて錯視図形が大いに発見された。それを追うように脳研究が隆盛となり、網膜以降のニューロン単位の視覚情報の流れがかなりの精度で解明されている<sup>[7]</sup>。視覚情報処理の研究を受け、網膜、視神経または脳内の興奮伝達回路のメカニズムに錯視の原因を帰着させんとする研究が行われたが、基本的に2次元または3次元空間の変換、分割、グリッド間の相互作用などを方法論として用いる

ため、一部の幾何学的錯視を説明するに止まっている<sup>[6]</sup>。

ハーケン<sup>[8]</sup>は認知的反転現象、多義図形に着目し、これらの認知状態の転移をモデル化した<sup>[8]</sup>。このモデルはレーザー発振を説明するハーケン自身の自己組織系の枠組みを認知科学に応用したものである。反転現象を起こす最も顕著で有名な図形、ルビンの杯を例にとると、モデルの概要は以下のようになる。この図形において、杯を図とみなし、それ以外の部分を地とみなす認知状態を状態A、2つの向き合った顔を図と見なし、それ以外の部分を地と見なす認知状態を状態Bとする。状態A、状態B以外の様々な認知状態があるものとし、それらの認知状態を状態A、状態Bを含め、一次元空間に配列する。但し、状態Aと状態Bの間にはいくらかの距離があるとする。各の認知状態に対して、その状態の「認知のされ難さ」が決定されるものとする。認知のされ難さは認知に伴うエネルギー消費量と置き換えても良く、時間の経過と共にエネルギー消費量がより低い認知状態が選択されていく。状態Aと状態Bの「認知のされ難さ」の値が近傍の状態に比べて十分に小さく、またその値の差が十分に小さい時、状態Aと状態Bは局所的安定解となる。さらにルビンの杯のモデルにおいては局所的安定解はこの2状態に限られる。観察者がかの図形を見ることで生ずる認知状態をXとあらわす。初期の状態Xはどの状態であろうとも、状態Xはゆらぎが駆動因となって、現時点より近傍の状態のうち、「認知のされ難さ（エネルギー消費量）」の小さい方へと推移していく。充分時間のたった後、状態Xは2つの局所安定解の内のどちらかに安定することになる。その後、再びゆらぎが駆動因となって、状態Xは2つの状態間の「山」を超え、もう一方の認知状態に到達する。ゆらぎは恒常的に状態Xを変化させる駆動因となるが、ゆらぎの大きさが、状態Aと状態B間の山を超えさせるだけの大きなものとなるまでは、その時点の局所安定解に止まり続ける。ゆらぎが充分大きな値をとる時、状態Aと状態Bの間で状態遷移が起こり、それが続くとき、2状態間の振動が実現される。このゆらぎによる状態遷移と振動が認知的反転現象を表すとするのがハーケンのモデルである。

このモデルには不明な点が多い。状態A、B以外の認知状態、及びその一次元空間への配列順序、認知のされ難さの定義など具体的には示されず、メタファーとして語られている。が、PET（陽電子放射断層撮影装置）などの技術の発達により、神経回路の挙動が明らかになりつつある現在、上記のモデルをある

程度具体的にすることは不可能ではあるまい。しかし、ここでは具体化の可能性が重要なのではない。ハーケンのモデルは反転図形、多義図形の一般的解釈に対して、その形式化を試みた点に意義がある。本稿で指摘すべきなのは、認識を認知状態として捉えるならば、反転図形における図と地の反転は、2つの認知状態間の振動として語られることになる点である。多義図形においても事情は変わらない。が、一旦、対象図形に対して認知状態及びそのポテンシャルが定まるとするならば、局所安定解に対応する認知状態以外の認知状態をとることはあり得ない。ルビンの杯においては状態Aと状態B以外の認知状態はあり得なくなる。ある特定の時刻における認知状態に関しては初期状態とゆらぎに依存している。よって、任意の時刻における認知状態は原理的に無根拠であり、恣意的であると結論づけられることになる。

認識の能動性や運動としての性格は長く論じられてきた<sup>[9]</sup>。が、その能動性を例証する方法論として、認知状態の無根拠性が用いられる。例証のための認知状態を取り上げる時、その状態選択の意味を問われることは往々にして避けられず、さらに無根拠故に恣意的であるという結論が導かれ、結果、能動性や運動としての性格は軽視されることになる。本章でハーケンのモデルを取り上げたのは認識のモデルとして批判するためではない。得られている認知状態を意味づけするようなモデルの形式化は、認識が恣意的であるとの結論を導いてしまう事態そのものとなる事例を挙げるためである。認識は、現行の意味づけを常に覆しかねない運動の絶え間ない連続である。よって、反転図形、多義図形認識は図形に対して確定する認知状態の間の振動としてでなく、現行の意味づけを覆し続ける運動の結果、状態間を振動したかに観察されるものと理解されるべきである。運動は事後の結果として、振動もしくはそれとの対応によってのみ語ることが可能となる<sup>[10]</sup>。よって、状態の振動が観察されたとしても、実在する対象が有限状態間を移行するルールに則っているとは限らないことを、認識理解においては明瞭にすべきなのだ。よって、認識を運動として理解するための装置または象徴として、反転図形、多義図形を定位しておきたいのである。

### 3. 楽書きの認識論

読者に問いかけてみよう。あなたは次に述べる命令を受けるものとする。「今居る場所の身近にある楽書きを100個探し出してカメラに記憶させ、その映像を羅列せよ」。かかる命令を受けること自体不条理であるが、これを間違いなく遂行しなければ、あなたは決定的な不利益を受けるという不条理な状況にあることを仮定しよう。が、心配するには及ばない。遂行すること、決して不可能ではあるまい。近所の駅や公園、学校に行けば、楽書きを探すにはさほど困らない。多少の時間さえかければ、まず大丈夫だ。しかし、次の命令はどうか？「今居る場所から距離の近い順に楽書きを100個探し出してカメラに記憶させ、その映像を近い順に漏らさず列挙せよ」。あなたは困難を覚えるに違いない。あなたは手元に書物があるなら、その全てのページに目を通さねばならない。本棚が近くにあれば、棚の面や背面を調べるために全ての本を移動させなければならない。建物が近くにあるなら、その全ての壁を調べなければならない。楽書きはもちろん体系だって書かれているわけではない。検索手順など策定しようがない。ほんの身の回りのものにさえ、楽書きがあるかないかを調べ尽くすには膨大な時間と労力と注意力を要するだろう。もしこの命令を出されたら、あなた自身の不利益を回避するにはほとんど絶望的な状況である、が、あなたには一縷の望みがある。絶望しきってしまうには少し早い。なぜなら、命令を下すものにとっても、最近接な100個の楽書きの列挙が正しいかどうかを判定することが困難だからだ。あなたは見つけることが出来たものだけを列挙するだけで、命令を下す者をごまかし、不条理な状況を回避することが出来るかも知れないのである。

上記の寓話の中で重要なことは、楽書きはそもそも発見されるべきものであるということだ。楽書きは体系だって書かれるものではない。むしろ世界を体系だって理解しようとする動きに抗して書かれたり、世界に対する新たな視点を提供せんとして書かれたりしたものもある。その意味で楽書きは元来、芸術に昇華され得る可能性を持つ。更に、ある記載から「図」を浮かび上がらせるだけでなく、記載されていない部分に「地」としての意味を与える点が重要である。共同体内の慣習を超えて、図と地の意味を与えることが可能である点が、ここで強調されねばならない。本来、掲示板でも自己紹介の場でもない神社仏



闇の壁や史跡からどこの誰ともつかない者の氏名や電話番号を読みとることは往々にして経験することであり、多くの読者はこれに憤りや嘆きを覚えるだろう。私もその一人ではある、が、ここではその情動には触れない。神社仏閣の壁や史跡などから、図と地の両方を同時に浮かび上がらせたことこそ、現行の意味づけを覆しかねないまま続く、認識という運動の結果と見るべきなのだ。図と地の両方を同時に浮かび上がらせる事が可能ならば、認識は能動的な運動である。それは、発見されるまでは図と地という地平で語られるべきでなかった対象にかかる地平をもたらずからである。

上記の楽書きの認識についての記述は、従来の認識論の枠内の議論である<sup>[9]</sup>。テキスト内の文字や図版の認識、机の上のペンの認識、街を歩く犬の認識においても、いずれも必然性なく認識可能であり、その意味では発見されるものである。しかし、楽書きの認識が可能であることを私はあえて強調する。繰り返すが、認識は対象に対する現行の意味付けを覆しかねない運動の絶え間ない連続なのだ。反転図形、多義図形も、認識の運動論としての理解の象徴となる。但し、楽書きの認識は道徳、社会的慣習、自らの世界観、予測可能な事態などから逸脱するものへの意味づけが可能であるという点が異なる。よって、別の意味で、楽書きは、認識の運動論としての理解の象徴になるだろう。楽書きを発見したときに沸き上がる情動は、楽書きの認識と切り離して考えられるものではないはずである。認識が現行の意味づけを覆しかねない運動であるとは、情動を興す可能性が認識に追隨していることなのである。

#### 4. 落書きと楽書きの運動論

前章まで、落書きによってメディアとメッセージという地平がもたらされ、それに加えて道徳慣習の及ばぬ時空間の分節がもたらされること、認識が能動的な運動であり、図と地を分節する地平を対象にもたらずこと、楽書きの認識が道徳慣習、世界観から逸脱するものへの意味付けを可能にすること、これらのことを述べてきた。ここでは、落書きと楽書きの定義の両方に属するような記載を取り上げる。両方の定義を満たすものを「落書き＝楽書き」と記す。

認識論は観察する主体に問いかける方法論を採る。楽書きの定義において、私は読者自身の経験に頼ってきた。が、以下では、被観測者が「共同体内の慣

習上、本来書かれるべきでないところに書かれており、見つけた者に憤りを感じさせたり、喜怒哀楽の情や驚き、不可解さを興させる人為的な記載」と判断するような記載を楽書きとする。特定の記載が楽書きであるかの判断は被観測者が認識した事後に決定される。なお、被観測者が1章の定義を満たす様に落書きしたならば、その記載を落書きとする。落書きと楽書きの両方に属するもの「落書き＝楽書き」には、例えば駅や学校、神社仏閣にあるものなどでよい。なお、落書きの定義を随分限定して行ったが、本来、記載されるのは壁以外の場所でも良い。書物の中でも表紙でも、鞆の中でも表側でも、自動車のボンネットでも、場合によってはあなた自身の背中でも。しかし、行論のため、出来るだけ小さい定義に止めておく。落書き＝楽書きの認識においては図と地の分節は、そのままメッセージとメディアの分節に置き換えられる。すなわち、壁に残る傷やインクのしみ跡が図でありメッセージでもあり、書かれた壁が地でありメディアでもある。落書き＝楽書きの認識は落書き＝楽書きの行為者が落書きして初めて起こる。落書き＝楽書き認識の場面を想定しよう。行為者はメディアとメッセージを同時に発生させ、さらに同時に道徳や社会的慣習の効力の及ばぬ時空間を切り分ける。被観測者である行為者と認識者はそれぞれ別の人間で、認識者は落書きの作成後、行為者がその場を立ち去ってからそれを目の当たりにするとする。認識者はそのメディアとメッセージを分節できたとする。彼は如何なる意味を受け取るだろうか？メッセージの文面をそのまま受け取る場合、認識者の近くにただの非常識な人間がいると判断する場合、認識者と同じく（または違って）道徳や社会的慣習と戦っている者がいると判断する場合、など抽象的に考えてもいくらかの可能性が考えられる。認識者の意味付けはメディアとなった場所、メッセージの具体的文面または絵に依存する。また、道徳、社会的慣習に対する反抗そのものに対しても、その内容や効力も含め、認識者に依存する。認識者の意味付けを事前に、つまり認識者が落書き＝楽書きを目の当たりにする前に、その意味付けを特定する事が出来ようか。また、世界に同じ場所はないため、任意の落書き＝楽書きは世界に一つしかない。任意の落書き＝楽書きに対して、任意の認識者の意味付けを事前に特定することはいかなる観察者にも不可能である。それは、多重に切り分けられた空間に対して、それを認識するための地平を事前に特定できないからだ。不可能な事を指摘しても無意味か？そうではない。

事前に認識者の意味付けの構造を特定できるならば、静的構造論を脱することはない。静的構造の中では歴史的時間は流れない。とるべき選択肢が特定できないままに未来が開いているからこそ、時間は流れるのである<sup>[10]</sup>。ここでは落書き＝楽書き生成者が多重に時空間を分節し、それに対して認識者が如何なる意味を与えるのかを特定出来ないからこそ、歴史的時間は流れる。それは例えば、生成者と認識者の間にコミュニケーションが発生することさえもたらし、新しい小さな共同体を作り出すことさえあるのだ。新しい共同体にはそこでの道徳や慣習も新たに発生するだろう。無論、ほんのまれにしか起きないこと疑いない。しかし、具体例がある。

日本の第2次世界大戦の戦前戦中、旧制一高において反戦の落書きが頻発していた<sup>[11]</sup>。中にははっきりとした軍批判や天皇批判もあった。旧制一高内は憲兵が見回りに来る場所であり、時に私物のチェックさえあった。私が注目するのは一つ目の反戦落書きをした者、及び二人目である。一つ目をした者はまさにメディアとメッセージの生成者であり、当時の制度や社会的風潮に対する反抗の態度表明そのものである。また、匿名を用いて書くことにより、道徳や慣習だけでなく制度や風潮の効力の及ばない時空間の存在もふせて表明することが出来た。二つ目も同一人物の仕業かも知れない。しかし、別の方法での反戦の意思表示もあった以上、全て同一人物と言うことは考えにくい。では、二人目は如何なる者か？それは落書き（＝楽書き）の認識者であり、認識を通じて自分と同じ反抗的意志の存在を知った者である。彼は一人目の作成者と同じ方法を選択したのだ。その後、第一の生成者が認識者となった時、両者のコミュニケーションは成立し、匿名でありながらも小さな共同体が誕生した。小さな共同体は次第に大きくなり、旧制一高は反戦ムードを大きくしていった。落書きと反戦ムードとの因果関係は調べようもないが、匿名でありながらも、反戦の意志を同じくする者の共同体が旧制一高内に存在することは、落書き発生以来、学生にとって確かなことだったはずである。当時の制度や風潮にとどめを刺したのは彼らではなかったが、エリート官僚を多数輩出していた旧制一高において、反戦の意志を同じくする共同体が発生、拡大していたことは、彼ら自身による制度改革や風潮の打破が行われた可能性を秘めていたかもしれない。

具体例が静的構造論に回収されることは防げない。しかし、ここで敢えて具体例を持ち出したのは、二つのことを指摘したいがためである。一つは旧制一

高の反戦落書き作成者の一人目と二人目の行為がどれほどギャンブル性に富んでいたかについてである。落書きという行為を通して時空間は多重に分節されるが故、それが如何に認識されるかを行為者は事前に特定できない。憶測めいた言い回しが許されるならば、例えば検閲を受けて虱潰しに調べられ、大きな不利益を被る可能性もあったのである。それがわからなかった時代風潮ではあるまい。にもかかわらず、ただだからこそ、彼らは賭にでる、いわば跳躍することを選択したのだろう。指摘したいことのもう一つは、共同体への反抗の意思表示として意味付けられる落書き＝楽書きが新たな共同体の発生を継起することさえあり得ることである。

我々は共同体の中に生き、共同体の道徳や慣習の影響を受けているが、共同体の制御下にあるわけではない。よって、我々自身落書きの作成者になることが可能である。また我々の意志と関係なく、楽書きの認識者となることも可能であり、それはしばしば起こる。つまり、新たな共同体の発生に対して我々自身が関与し得る可能性を常に我々自身が持っているということなのである。無論、これは落書きするという行為、楽書きの認識に限ったことではない。あらゆる行為は時空間の分節と観察され得るし、あらゆる認識を事前に限定することは一般には不可能である。また、共同体の発生、崩壊、維持、修正は枚挙しかねるほどの多くの要素が絡むものである。そこを敢えて、落書き＝楽書きを持ち出すのは、我々の行為及び認識が運動の起点になり得ることを確実に示すためである。大部分の具体的な落書き＝楽書きはつまらなく、打ち捨てられるべきであり、共同体の発生に関与するところではない。しかし、決して無意味ではないのだ。落書き＝楽書きの行為と認識は、共同体の発生や崩壊さえ起こし得る運動の継起を理解するための、また自らを運動の起点となし得ることを理解するための概念装置、または象徴として機能するだろう。

## 5. 落書きと楽書きのメディア論

近年の電子通信分野の発展に伴い、M.マクルーハンの言の引用は多くの書物や論文に見られる。工学系の論文においてさえ、引用は少なくない。しかし、その多くは引用して解説するだけに止まり、それを発展させる議論に至らない。W-J. オングはマクルーハンの言「メディアはメッセージである」をご託宣

と称した（訳書より抜粋）<sup>[5]</sup>。また、かの言について、逆説的な定式化が議論に不要な混乱をもたらした、メディアはメッセージそのものではさしあたりあり得ない、などの否定的見解も見られる<sup>[12]</sup>。マクルーハン批判に共通してみられるのが、「AはBである」という文を「 $A=B$ 」または「 $A \subset B$ 」であるとの捉え方をしている点である。（なお、全文での記号「 $=$ 」「 $\subset$ 」は、集合論的に用いている。）が、一つの文の中で視点を移動して語ることは可能である。もしこれを足がかりに議論を進めるのであれば、視点の移動に追従しなければならないが。かの言「メディアはメッセージである」においては視点が時間推移の中で変化している。これは電子通信分野の発展による我々の時空間感覚の変化を見通したものとして高く評価されている。しかし、この言を時代の変化を語ったものと評価する一方で、「 $A=B$ 」または「 $A \subset B$ 」式の捉え方をするのは不当であろう（記号については、前述と同様）。かの言においては、時間的視点の移動が含まれており、時間の流れや共同体内部の継起する運動の連続が、既に前提となっているのだ。よって、この言を評価する者は、その前提を引き受けることになる。マクルーハンはこの言において運動を語っていたのだ。

しかし、前提を引き受けてしまうことと、その前提を理解することは同じではない。メディアとメッセージという地平において、時間の流れまたは運動の継起が語られねばならない。その方法論として、「メディアはメッセージである」と同時に「メッセージはメディアである」ことを示すことを採用しよう。メディアが一方向的にメッセージになっていくのではなく、メッセージも時にメディアとなることが、両者の連関的相互作用を表す。メディア、またはメッセージとされる対象が、同時にメディアでもメッセージでもあることを示すことが、継起し続ける運動と時間の流れを表す。これを確実に示すため、再び落書き＝楽書きを引き合いに出そう。

二つの両義的言を示すのは、前章までの議論を援用すれば良い。現代において、落書きは時空間を多重に分節する。分節されたメディア、つまり記載された壁は共同体の道德や慣習の効力が及ばない時空間として、外の時空間から切り分けられたのだ。この時空間の存在が認識されるならば、この時空間が存在することがメッセージとなる。壁というメディアがメッセージでもあるのだ。また、落書き＝楽書きは本来的に同じものはない。世界に同じ場所はないから

だ。たとえ同一の記載内容でも、慣習道徳からの逸脱の意味は、書かれた場所の社会的役割や機能によって異なる。卑近な例を挙げれば、よくあるトイレの落書き＝楽書きと同じ内容が、全く落書き＝楽書きのなかったところ（例えば国会議事堂の門や貼り紙されたあなたの背中など）に書いてあれば、トイレのものとは違う意味を持つだろう。分節されたメッセージ、つまり壁の記載内容は書かれた場所の影響を受けながら意味づけされる。落書き＝楽書きの定義から、壁の記載内容はメッセージである。その一方で、メッセージの文面がかかれた場所の影響を受けながら意味付けされるならば、メッセージの文面そのものは他のメッセージを運んでいることになる。つまりメッセージがメディアとなっているのだ。文の代わりに絵でも良い。これらのことは落書き＝楽書きに付随する本質的な性質であり、避けようがない。記載された内容をメッセージとして受け取るならば、そのメッセージが別のメッセージをもたらすことになり、記載された壁をメディアと見なすなら、その壁をメディアとすること自体がメッセージとなる。メッセージとメディアという分節が、新たな分節をもたらす運動を継起するのだ。

以上、マクルーハンの言が前提としていた時間の流れと運動の継起を明瞭にするため、引いてはマクルーハンの言を補填するため、かの言と逆の言について議論した。無論、落書き＝楽書きに限定される議論ではない。任意の行為は時空間の分節として捉えることが可能であり、任意の認識が事前に確定されないように、メディアを使用して発信するという行為とメッセージを受信するという認識の間に連関的相互作用が起こることに何の不思議もない。マクルーハンの言がいくつかの特定のメディアで成立することは述べられた<sup>[1]</sup>。逆の言においても、特定のメッセージにおいてならば成立を示すことが出来るだろう。さらに、例えば、テキスト解釈における「行間を読む」という言を取り上げてみよう。これは、書かれたテキストの記号以外の別のメッセージを読みとることを意味する。「行間を読め」という命令は「テキストをメッセージ以上にメディアとみなせ」といっているのだ。しかし、「行間を読む」というのは、テキストを読むという行為に不可避免的に付随しているわけではない。「メッセージがメディアとなる」場合があるという以上の帰結はない。指摘すべきは「メッセージがメディアである」ことの原理的成立の場である。よって、両義的な二つの言が確実かつ不可避免的に成立する場を示すこと、私はこれを指向した。

前章までに、落書き＝楽書きの行為と認識の相補的連関を、運動の継起の理解のための概念装置または象徴として定位することを述べた。本章では落書き＝楽書きをモデルとして、マクルーハンの言とその逆の言の両者が同時に成立する場を指摘し、その場における運動の継起を示した。ここで、マクルーハンの言、及びメディア論において、運動の継起と時間の流れを明瞭に意識するために、マクルーハンと逆の言を装置として定位して本稿を締めくくろう。メッセージはメディアである。

## 注

- [1] McLuhan, Marshall, "Understanding Media", 1964（栗原裕・河本仲聖訳, 「メディア論」, みすず書房, 1987）.
- [2] 大辞泉, CD-ROM 版, 小学館, 1997.
- [3] と学会, 「トンデモ超常現象99の真相」, 洋泉社, 1997.
- [4] 本村凌二, 「ボンベイ・グラフィティ：落書きに刻むローマ人の素顔」, 中央公論社, 1996.
- [5] Ong, Walter J., Orality and Literacy, 1982（桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳, 「声の文化と文字の文化」, 藤原書店, 1991）.
- [6] 椎名 健, 「錯覚の心理学」, 講談社現代新書, 1995.
- [7] 立花 隆, 「脳を究める一脳研究最前線」, 朝日新聞社, 1996.
- [8] H. Haken, "Synergetics" (Springer, 1979), 牧島邦夫・小森尚志訳「共同現象の数理」, 東海大学出版会, 1980
- [9] 広松 渉, 「もの・こと・ことば」, 劉草書房, 1979, 広松 渉, 「哲学入門一歩前」, 講談社現代新書, 1988.
- [10] 松野孝一郎, 「現象としての時計と記号としての時間」, 現代思想, vol. 25-7（1997年6月号）.
- [11] 稲垣真美, 旧制一高における非戦の歌・落書き, 「日本平和論体系15」, 日本図書センター, 1994.
- [12] 例えば, 吉見俊哉, 「メディア時代の文化社会学」, 新曜社, 1994.  
なお, 吉見は批判するだけでなく, 自らもマクルーハンの言の修正を試みている (pp.43)。